



1. 不況と就職
2. 大冊「土木工学ハンドブック」
3. 環境行政の近況

1. 「総需要抑策」「公共投資繰り延べ」「受注の落込み」「建設資材高騰」「人件費増加」「経営不振」「景気の見通し立たず」「建設業倒産相次ぐ……」。10月解禁の高校生の就職戦線はこんな状況の中ではじまった。大手の建設業が本年度は高校生採用ゼロと発表した。大手を目標にしてきた生徒はショックだったろう。しかし、大手だけが工事をしてるわけでもあるまい。頑張ることを期待しよう。

さて、問題はこれからだ。新聞記事は続く。「この方針は好況となっても続ける予定。何とならば、大学進学率の高まりで工業高校生の質が低下し、技術革新についてゆけない」「構造、材料も複雑化し工高卒では教育しきれない。したがって、大学卒で今後やってゆきたい」……ということである。

今年、土木学会は60周年を祝った。工高では産業教育90周年を迎えた。祝いたいのが祝えないらしい。土木の第一線の中堅技術者養成という誇り高き使命は、大学進学をあおる父母のみでなく、とうとう建設業界からも無用のレッテルを押されかかってきた。

数年前、米作農家に転期があった。今はまた増産の声が聞える。必要なものは生き返る。

産業教育100周年記念のときは、盛大なお祝ができるよう学会の皆さんの声援を望みたい。 [C]

2. 新しい土木工学ハンドブックが発刊された。土木学会の創立60周年を記念するにふさわしい企画であり、その完成を心から祝いたい。片手では持てない大冊のハンドブックであるが、元々この言葉の意味は、便覧、手引書などであるから、気にする必要はない。43編・3000ページに及ぶボリュームは土木工学の体系の雄大さを示し、これに凝集している内容は、わが国の土木技術の水準の高さを誇るものといえよう。

旧版と比較すると、編数が5編増加しており、専門分化の進展を反映している。また、くだらぬことであるが、旧版の値段は当時の初任給のほぼ1か月分に相当したのに対し、新しいハンドブックは大体半か月分で買えるといった点も興味のあることである。

しかし、このハンドブックがカバーする技術のみでは土木技術者が今日当面している諸問題を充足できなくなっていることも残念ながら事実であり、はみ出している問題に対して、どのようにして共通の展望を持ちうるか、今後の重要な課題といえる。 [J]

3. 自動車排ガス規制問題を筆頭に大気保全行政はいくつかの重要な案件をかかえている。そのなかで、昭和49年5月の国会で大気汚染防止法一部改正の形で成立した「総量規制」が、いよいよ実施されるようになった。この大気汚染防止法に基づいて総量規制を実施するために必要な汚染予測手法は、電子計算機の利用による拡算式に基づいたシミュレーション法が用いられる。これは拡散理論を基礎としたものであって、観測点を設置していない高濃度地点を発見できること、環境目標を達成するために必要な削減量を明示できるなどの要件を備えている。また、実測値との適合性は、高い相関性をもった理論モデルを選ぶこととなっているが、今後、科学的かつ合理的なシミュレーションを行うことが要請されることはいうまでもない。

煙源データ、気象データ、拡算モデル等が、このシミュレーションのきめ手になるが、おのおのの要素が同じレベルでの精度を有することが必要であり、全体のエラーを少なくするため、どの要素が一番響いてくるかの感度分析（センシディビティアナリシス）が今後検討されなければならないだろう。

環境アセスメントにおいて開発行為による影響、例えば、大気汚染、水質汚濁の将来予測を行う場合に与えられた人と、予算の範囲で効果を上げるためどの要素のデータの精度を優先的に得ておくか、この感度分析は重要な示唆を与えるだろう。 [J]